

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

寮歌の形成過程と文化的背景：
「花は櫻木」から「都ぞ弥生」へ

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/905

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



寮歌の形成過程と文化的背景

——「花は櫻木」から「都ぞ弥生」へ——

下道 郁子

1 はじめに

寮歌は、旧制高等学校の儀式文化の一つとして論じられてきた。ストームや応援合戦で太鼓を鳴らし、肩を組んで歌う様子は、蛮カラな男らしさの象徴として、愛校心の発露として、友情の証として語られてきた。学生生活と深く結びついてきた寮歌は、限られた特別な人々の為の歌の儀式として見られ、一つの音楽ジャンルとして見なされているとは言い難い。唱歌、童謡、軍歌、流行歌謡等の他の日本の歌と同じように、愛唱歌として歌われた名歌が多くあるにも拘わらず、その音楽文化的価値について問われることはほとんどなかった。

作曲家の呉秦次郎は寮歌を「同じ野生の音楽でも、寮歌は教養高き天下の秀才によって作られ歌われている点、寮歌が庶民的ながら、低くして高いという不滅の光を放つ所謂である」と評している¹。同年代の約1%の選ばれし青年達が作詞作曲した歌ではあるが、音楽的には稚拙で、その歌唱スタイルは野卑で「低い」というのが、寮歌の一般的な概念であろう。「教養高きエリートによる文化的には低い歌」という相反のイメージが寮歌にはつきまとう。しかし寮歌はストーム、寮雨、応援合戦の声援といった旧制高校生の蛮カラパフォーマンスと同列に置くことはできない。なぜなら寮歌は青春の欲求をはらす、若さ故のバカさ加減の行為ではなく、後世に生きる者が享受し、伝承していく価値を備えている文化だからである。事実、多くの旧制高等学校の同窓会が、楽譜資料の集大成として寮歌集又は歌集を出版してきた。寮歌は歴とした音楽文化遺産なのである。

本論では、旧制高等学校の寮歌の形成過程の考察を通して、その文化的意義や価値の再検討を試みる。寮歌形成期は、和洋漢の文化が接触し、日本の音楽文化が急速に複合的に発展した時期でもある。寮歌が発生した要因や、生徒達が自作自演した理由、影響を受けた諸文化を探求し、改めて音楽文化として理解していく。

1 日本寮歌振興会・呉泰三編『寮歌おんち』1965

2 本論における寮歌の定義と成立期の設定

まず、本論で対象とする寮歌を定義しておきたい。高橋佐門によると、「寮歌とは、寮生活を中心に、寮生により作られ、歌われた歌」と定義し、さらに1校歌、2記念祭歌、3運動部歌、4各部歌、5応援歌、6逍遥歌・行軍歌、7送別、壮行、歓迎歌、8頌歌・記念歌、9寄贈歌、10自然発生的にできた俗謡調の歌、の10種類に分類している²。「寮生により作られた」と狭義に定義すると、皆全寮制を敷いていた第一高等学校の寮の歌以外は、この定義に当てはまらなくなってしまう。よって本論では広義に定め、上記の10種類の歌を含むこととする。

次に寮歌が発生し一応の確立を見るまでの時期を設定する。寮歌の起源は明治20年代前半の第一高等中学校の部歌と考えられるが、「生徒が自ら作詞作曲をし、それを定例として継続する」という形になった過程は明らかにはなっていない。本論では第一高等学校の寮歌1号と言われる「花は櫻木（明23）」から北海道帝国大学予科「都ぞ弥生（明治45）」までを、寮歌の形成期とする。この期間には三大寮歌と呼ばれる第一高等学校の「嗚呼玉杯」、第三高等学校の「紅もゆる」、上述の北大予科の「都ぞ弥生」が発表されている。寮歌としての独自の型が一応確立され、それが愛唱され、伝承され始めた時期と考える。

3 形成期の音楽状況の概観

（1）歌唱演目—明治23年～明治28年までの第一高等学校の例

寮歌第1号「花は櫻木」が発表された明治23年頃から、「嗚呼玉杯」が生まれる明治35年頃まで、一高生は学内で、どのような歌を歌ったり、鑑賞したりしていたのだろうか。第一高等中学校時代の明治20年代、一高では未だ寮歌の理念も確立されておらず、応援歌に対する関心も低調であった。しかし学内で音楽と関わる場はあった。明治23年10月に創設された校友会に25年から音楽部が置かれ、積極的に活動していた。また予科第二級に唱歌の授業があり、音程と拍子に関する解説や演習、発想記号や聴音法の大意等が教えられ、「君が代」「五倫の歌」「大和魂」「紀元節」「皇御国」「御国の守」「蛍の光」「天長節」「御国民」「日本男児」「霞か雲か」の歌唱練習も行われていた。27年に第一高等学校になると、予科が廃止され、それに伴い唱歌の授業もなくなり、音楽部も休止となった³。以後、正課としての音楽活動の記録は中断してしまうので、ここでは23年から28年までの一高の音楽会の演目を年代別に列挙し、生徒達の音楽環境の手掛かりとする⁴。

2 高橋佐門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』pp.3-6

3 『一高応援団史』pp.25-26

4 各雑誌に掲載された原文から、筆者が表を作成した。曲名、編成など不明のものもある。

明治 23 年 第三回唱歌演習会

第一高等中学校の校内にて行われ、演奏会の様子は『音楽雑誌』に報告があり、それによると演目と演奏編成は次の通りである⁵。

歌唱	「君が代」「皇御国（二部唱）」「御国の民」「岸の櫻」「旭の旗」「大和魂」「高嶺」 「湊川（合唱 落合直文の新作）」「鷹狩（単音唱歌）」「秋の夕暮（単音唱歌）」 「招魂祭（複音唱歌 東京音楽学校男子）」 「独語唱歌（デル、グーテカメラード）」「独語唱歌（ライテハス、モルゲンザング）」 「英語唱歌（ホッイチエバー、ウエイ、ザ、ウィンド、ダス、ブロー）」 「英国国歌」「千草の花（二部唱 東京音楽学校諸氏）」 「英語唱歌（マーチング、スルー、ジョージア）」
器楽	「洋琴連弾」「管弦楽（式部職楽師）」「日耳曼ガロップ（洋琴とヴァイオリン合奏）」 「ホーム、スイート、ホーム（洋琴とヴァイオリン合奏）」「ソナタ（洋琴 東京音楽学校専修生）」

明治 26 年 2 月 校友会音楽部第一回演奏大会

『校友会雑誌第 24 号』に生徒による批評が載っており、それによると演目と演奏編成は次の通りである。

歌唱	「君が代（来場者一同による唱歌）」「忠臣（複音唱歌）」「薔薇（複音唱歌）」「楠公、小楠公」 「寄宿寮の歌」「浮雲（独吟と合唱）」「兵士の決別（四重音唱歌）」「桜は香くはし」 「Die Wacht am Rhein（唱歌）」「Kriegs Lied（四重音）」「Twilight is Falling」 「Der altesbarbarossa と Das Lied（東京音楽学校諸氏）」「高等商業音楽会会員による唱歌」 ⁶
器楽	「Dumberton's March（洋琴連弾）」「箏曲六段調洋琴及風琴」「亂の調（洋琴独奏）」 「Romance」「ベートーベン、メンデルスゾーンの風琴独奏」「Gavotte（風琴独奏）」 「小野の山」（中止）「Largo（風琴）」 「Home sweet home（ヴァイオリン独奏）」、「Cavatina（ヴァイオリン独奏）」

ここで初めて「寄宿寮の歌」が登場している。これは教授で詩人でもあった落合直文の作詞「雪ふらばふれ」で前年の 25 年に発表されたが、曲については「月と花とは昔より」の譜でと記されていた。「落合教授の作に係る寄宿寮の歌の新譜なるべし」、「同教授は音楽部の鈴木米次郎先生と共に我校の精神を代表すへき校歌を作らんとして苦心せらる居し」と記録にあり⁷、26 年の演奏会にあたり唱歌指導をしていた鈴木米次郎講師が曲をつけたと推測できる。この批評の中で「和洋両楽調和をはからんとする平素の志のあらはれ」として箏曲が演奏されたことを評価しているのも注目に値する。一方で、唱歌に関しては「進歩したりと言ひかたし哉」とさらなる勉強を進言しながら、今回の演奏会の唱歌は expression の歌が多く、兵卒の歌うものとは品格が異なり、多少力なきようにきこえたかも知れないと評している。

5 『音楽雑誌第三号』1890 pp.25-27

6 曲名は不明

7 『校友会雑誌』第 23 号 明治 26 年 p.36

明治 26 年 4 月 校友会音楽部臨時演奏会

『校友会雑誌第 27 号』に報告がある。「一度奏樂にかかれは閉目沈思耳を敬て寂然たるは、わか校諸士の音楽思想に於ける一大進歩といふべし」と聴衆の姿勢を評価している⁸。

歌唱	「君が代」「鏡なす」「富士筑波」「御国の民」「元寇」「進軍歌」「岸の櫻」「遊獵」
器楽	「六段」のヴァイオリン独奏

明治 27 年 校友会音楽部第二回演奏大会

『校友会雑誌第 35 号』に生徒による批評が載っており、それによると演目と演奏スタイルは次の通りである⁹。

歌唱	「君が代」「富士山」「琵琶湖」「ロオレイ」「此戦」「懷良友（独民謡、原語による吟唱）」「襲撃（独吟）」「黒船（音楽学校諸氏と音楽部との競争）」「天津乙女（独吟）」「唱歌（音楽学校諸氏コーラス）」「大塔宮」
器楽	「Voluntary 及び Washington's March（風琴独奏）」「六十万人進行曲（風琴独奏）」「The Nun's Prayer（風琴独奏）」「碧蹄館」「ロオヘンクリン（洋琴独奏）」「Bucephale（洋琴独奏）」「ヴィエンナ、マルチ（洋琴独奏）」「洋琴 Duett.」「洋琴トリオ」「Donx Souvenir du pays（洋琴独奏）」「アンダンテ、トランキル（ヴァイオリン独奏）」

この批評で注目すべきことは、「琵琶湖」は「踏歌に似て句調よき歌なれば」と述べられており、当時の聴衆には、日本の伝統的曲調の方が受け入れやすかったことが窺われる。また、「ロオレイ」では「G より E の『オクタヴ』に上る邊餘程来るしかりし様に覚えぬ」と長 6 度の跳躍音程の難しさを述べている。「音楽学校諸氏と音楽部との競争」については後述する。

明治 27 年 10 月 数字譜の登場

『校友会雑誌第 40 号』に校友会音楽部部員の作歌、作曲による「御牀同じく正殿を」が掲載されている。ここで初めて文字だけではなく、数字譜が掲載される。作歌、作曲の記載はないが、「従軍行」も歌詞とともに数字譜が掲載されている¹⁰。

明治 28 年 3 月 各寮が新作唱歌を作歌

『校友会雑誌第 45 号』に「新作唱歌」として、東寮「寄宿寮五年祭を祝するの歌」、西寮「成海衛陥落の歌」、南寮「寄宿寮紀念祭の歌」、北寮「自治寮の歌」が掲載されている。歌詞のみで数字譜はついていない。北寮の歌のみ寮歌集(2004)では「日清談判破裂しての譜で」と曲譜に「ついて指定があるが、他の歌の曲は不明である。寮歌ではなく唱歌とされており、未だ寮歌の概念

8 『校友会雑誌』第 27 号 明治 26 年 pp.54-56

9 『校友会雑誌』第 35 号 明治 27 年 pp.29-34

10 『校友会雑誌』第 40 号 明治 27 年 pp.82-87

が確立していないこと、またオリジナルの曲を作るという考えがなかったことがわかる¹¹。

明治 28 年 5 月—校友会音楽部臨時祝捷演奏会

『校友会雑誌第 48 号』に生徒による批評が載っており、それによると演目と演奏スタイルは次の通りである¹²。

歌唱	「君が代」「大元帥陛下奉迎の歌」「旅順口の戦い（合唱）」「遠征故郷を想ふ（合唱）」「我国（合唱）」「赤心愛國の士（合唱）」「愛國（合唱）」「破邪曲—クライネ、レクルート（合唱）」「益荒武夫—Marching thro' Georgia（合唱）」
器楽	「ウィンナ、マルチ」「クーラウの寺院ソナタ」「クレメンチイのソナタ(ピアノ独奏)」「Benedictus（風琴独奏）」「メーデンスプレーヤー（風琴独奏）」「アルメッター、ダムール（洋琴独奏）」「独国歌ラインの守りが入った行進曲（ヴァイオリン、洋琴合奏）」「八千代獅子（オルガン、ピアノ、ヴァイオリン）」

明治 23 ～ 28 年までの特徴

この期間の歌唱演目の傾向としては軍歌や愛国歌等、戦争と関連した歌が多い。日清戦争の影響が強かったと思われる。また、英独仏の愛国歌や民謡が盛んに歌われたのも特徴で、外国語を重視したカリキュラムの影響が見られる。箏等の邦楽も取り入れ、和洋折衷を意識している。演奏編成としては単音唱歌のみではなく、重音や合唱も行ったようだが、批評から読み取る限り、あまり良い出来栄ではなかったようである。年代が進むにつれて、器楽合奏の割合が増えてくる。東京音楽学校や東京商高を招聘することもあるが、交流による合同演奏というよりも、ライバル意識が強く、対抗試合のような印象を受ける。未だ、唱歌と寮歌の概念は曖昧である。

（2）寮歌観—明治 20 ～ 30 年代の批評

旧制高等学校では校友会雑誌が発行され、生徒達が積極的に、小説や詩の投稿を行っていた。各校の雑誌には寮歌に関する文章も掲載された。

「寮歌」—転換となった論文（第一高等学校）

明治 23 年の端艇部歌「花は櫻木」が、同 25 年に落合直文作詞の寄宿寮歌「雪ふらばふれ」が発表される。その後明治 28 年からは各寮が競って寮歌の創作を始めるが、初期に発表された約 13 の歌は、いずれも曲は軍歌等の指示があるのみで、オリジナルの曲ではない。しかし明治 33 年第 10 回記念祭寮歌「あおくすみたる」で初めて、作詞作曲とも寮生による寮歌が生まれ、これを契機に 34 年以降になると、歌詞、歌曲共に充実し、「春爛漫の花の色」「嗚呼

11 『校友会雑誌』第 45 号 明治 28 年 pp.10-12

12 『校友会雑誌』第 48 号 明治 27 年 pp.36-51

玉杯に」などの名寮歌が続出し始める。この転換期の原動力となったと考えられるのが、明治33年1月発行の第一高等学校の『校友会雑誌』第93号に発表された一論稿である¹³。

熊沢宮水閣主人という匿名の投稿による「寮歌」と題する論稿には、寮歌の現状を憂い、新しい寮歌を熱望すると共に、音楽や歌曲が人間に与える力について記されている。海軍機関学校に進んだ旧友の「貴校の校歌を聞かんと」という問いに「寮歌を以てす」と答えるが、「ポートルースの歌を寮歌とするとは」とさらに反論され、その答えに窮するという場面から始まる。この後、この論者は「歌謡音楽に耳は敬つ能はざるものは悪魔なり」とルターの言葉を引用し、またワーテルローの戦い、倭寇、ナポレオン、項羽の戦いの場面での音楽の効用を述べ、音楽が人や国に及ぼす力について論じる。

噫々、歌謡音楽の人を左右する、何ぞ夫れ大なる。志気に、品性に、健康に、道徳に、小にしては一身の浮沈をなしめ、大にしては国家人類の安危に係る。事小なるが如きも、及ぼす所広しと謂うべし¹⁴。

そして、一高にはポートルースの歌しか、歌うべき歌がないことを嘆き、新しい寮歌の待望と募集を呼びかけていく。

而して顧みて我が寮歌なるものは如何。第一高等学校の寮歌なるものは如何。是、某が評せる所の如く、実にポートルース歌なり。…中略…是をしも第一高等学校自治寮に於ける歌となすか。文に武に天下学生の覇を称する我が寮生の認む歌となすか。我は毎に全寮茶話会の終わりに際し、此れが合唱を為さんとするや、必ず聊か逡巡せざるを得ざりき。是我のみにあらざんか。…中略…さはれ、人或いは謂はん。『花は櫻木』は是れ寮歌にあらず、寮歌は是れ『雪ふらばふれ』まりと。是実に然り。吾亦之を認む。されど悲しい哉、校友の多数は寮歌として之を認めざるなり。是何ぞや。其の歌詞優にして且つ美なりとされども、雄渾を欠けばなり。其の曲、緩且つ悠にして荘嚴を欠けばなり…中略…悲哉我に吟すべき國歌なきなり、吾に唱すべき校歌なきなり、我に謳うべき寮歌あらざるなり¹⁵

現状を嘆き、雄豪の意気を注入すべき国歌、英風を鼓吹すべき校歌、志気を激励する寮歌を求めると結んでいる。さらに「文に武に雄を向陵に稱する濟々六百の寮友諸氏よ、卿等は辭するに、此歌を作り此曲を爲る得ざるを以てするの資格なきなり中略…豪爽雄麗なる新寮歌を以てせん事を望むなり」と呼びかけている。

この論稿からは、ポートルースの応援歌には価値を認めず、落合直文作歌の『雪ふらばふれ』

13 『校友会雑誌』第93号 明治33年 pp.68-71

14 高橋佐門『旧制高等学校全書』第6巻 生活・教養編(1) 旧制高等学校資料保存会 1983 pp.293-294

15 高橋佐門 前掲書 p.294

を評しているが、詩は優美でなく雄渾であること、曲は荘嚴であることを求めているのがわかる。また外国語の習得を重視したカリキュラムで学んでいた高校生にとって、英仏独の愛国歌が、関心の対象であったようで、この論稿でも「ドイツ人の祖国とは何ぞ」、「英国の少年は舷を叩いて Rule Britannia を謳ふなり」、「仏の士女は手を携えて Marsaille を唱するなり」と例を上げて、理想としていることが窺われる。寮歌や校歌の効用として、志気高揚を重要としながらも、単調な歌ではいけないという、一つの価値観が示されている。

寮歌の効用と曲の軽視（第一高等学校）

「嗚呼玉杯」が発表された明治 35 年 3 月の翌月に発刊した『校友会雑誌』106 号に賤屨子という匿名で「寮歌観」が掲載されている¹⁶。

寮生が元気を鼓舞し、我校風を天下に表白する點に於いて寮歌の功や實に偉大なりという可し。…中略…聞くならく春爛漫の歌は遠く九州の南陸に及べりとか、我曹また寮歌のために之を喜ぶものなり。然れども眞に向陵男子の愛しように價し、眞に我校風を遺憾なく発表せしもの果たして幾何かある。…中略…人或は曰く歌辭の如きは抑末のみ、寮歌の可否は一に其調にありと、我曹子之を聞て憮然長大息すること久し。その如き輩は寮歌の眞意義を解せずしてただ口舌の快を貪るもののみ、調はただ歌辭を圓滿に發表し得れば可ならんのみ。人或は曰く、寮歌はストームなる可し、行軍歌なる可しと、これまた謬れるものなり…中略…然らば我寮歌の標準は如何、曰く俗調を離る可し、曰く清新なる趣味ある可し、曰く其思想高遠なる可し、曰く千篇一律を避く可し、曰く元気を發露す可し。曰く要するに向陵精神の精粹を發揮する可し。

寮歌の内容は学校の精神や高い思想を表し、その効用は元気がでることだが、ストームとも行軍とも違うという内容である。また前年発表の「春爛漫」が九州で歌われているという記述から、寮歌の伝播が始まったことがわかる。音楽は歌う時の快感にすぎず、大切なのは歌詞とも述べている。

最後に 35 年発表の各寮歌についての批評が書かれている。西寮寮歌は賛美歌、中寮寮歌は奇怪、南寮寮歌は苦心の作、北寮寮歌は中学生向けと評されるが、東寮寮歌「嗚呼玉杯」については書かれていない。

作曲に関する批評（第一高等学校）

明治 41 年『校友会雑誌』第 75 号に「各寮寮歌の曲譜に就いて」が掲載されている¹⁷。詩や

16 『校友会雑誌』第 106 号 明治 35 年 pp.54-56

17 『校友会雑誌』第 75 号 明治 41 年 pp.65-69

内容にはほとんど言及せず、音楽面に特化した論稿である。論者は、ワーグナーに傾倒した、西洋音楽に通じた人物のようである。作曲する者の能力を讃え、その労をねぎらいながらも、問題点を4項目に分類し、具体的な要求が書かれている。

作曲の事容易ならんや。殊に寮歌の作曲に於いて次の四の主なる困難あり。

- 一、曲譜を附すべき原歌にはシラブルの規律正しき排置を欠く事
- 二、作歌者感情の排列不規則なる事
- 三、各節に共通なる點乏しき事
- 四、音楽の素養一般に浅薄なること

「一」は、寮歌の詩は七五調が多いが、七のシラブルが、3+4と4+3とがあり、これを譜につけると上手くいかないことを説明している。ここでは41年発表の西寮寮歌「蒼遠く匂冥の」を例にあげて、説明している。この曲では第2番の冒頭が「時運の轍と き わだち あとふかの跡深く、「新星しんせい途みち まばたに瞬みちぎぬ」で、譜面の音符の数は1小節目が4つ、2小節目が3つなので、2番では上手くいなくなる。「我等は多く此の矛盾に慣れて此れを感じず寧ろ悲しむべき也。」と述べている。

「二」は例えば3番と4番では、同じ節回しでも、詩の意味によって曲想が違って仕方がないと述べている。

「三」は例えば1番の歌詞が華麗な内容で、2番の歌詞が枯淡な内容だと、作曲者が1番と2番の共通点を見出して曲を作るのは難しいと問題視している。作詞者が同じような思想を繰り返しても、平凡で単調になってしまう。一見矛盾するが、共通点を見出して華麗と枯淡の中心感情に触れて曲を作るには才能ある作曲家がなすべきことである。しかし反対点を有し、共通点がない歌詞は、作曲家の思想を束縛してしまう。寮歌は読むべきものではなく歌うものなのだから、曲と詩が合って効果がある。世間に流布している唱歌集を参考にすると良いと結んでいる。

「四」は中学時代に音楽の学習を行っていない人が多いので、大衆が好む卑近、通俗、平凡な曲を作ろうとするが、これは無用である。嬰変（# \flat ）の臨時記号を用いることさえ、一高寮歌では高尚なことである。「楽聖ワグネルと雖、作曲を難事とすべし」と作曲の難しさを表し、寮歌の作曲者の才能に敬服しながらも、各寮歌の曲のおかしな箇所について厳しく指摘している。例えば南寮寮歌「弥生ヶ丘び花がすみ」では、2小節×5+3小節という構成を「奇抜で奔放」、2小節×6の偶数にするべきであると指摘している。不協和音に富むワグネルのタンホイザーを例にあげ、奔放な楽想も成立しないわけではないがこの曲は、前半の作りが平凡すぎて、相応しくない。結末のみ突飛で曲譜の美を害していると批判している。

校歌待望論（第三高等学校）

第三高等学校では、逍遙歌「紅もゆる」が発表される数年前から、校歌制定の機運が盛り上がっていた。明治36年頃、三高では寮歌の必要性が唱えられるようになった。一高では既に

明治34年に「アムール川の流血や」、「春爛漫の花の色」、同35年に「嗚呼玉杯に」等の名寮歌が生まれ、大いに影響を受けた結果と考えられる。「嗚呼玉杯に」の発表翌年の明治36年、三高『嶽水会雑誌』第21号に、「校歌選定の聲起こる」というタイトルのもと、以下のような文章が掲載されている。

校歌の学校に於る國歌の國家に於るに同じ、特色の發揮と志氣の宣揚とに與て力を致すことは述ぶるを要せず、今や年改まりしより校歌選定の聲漸く高きを加へんとす、喜ぶべきの現象なり…中略…吾人は唯わが榮譽ある本校を謡ふに於て缺如する所なき校歌の一時も早く選定せられんことを切望して止まざる所なり¹⁸。

生徒達は校歌や寮歌について論じ、その誕生を真摯に待ち望んでいたことがわかる。しかし、寮歌、校歌の区別は曖昧で、また詩や文体に関する意見はあるが、音楽に関する具体的な記述は見当たらない。

唱歌批判と自作への意気込み（第三高等学校）

明治37年には同雑誌に「寮歌現はる」という投稿が掲載されている。

…舎生二三子が寮歌制作の擧あるを聞く。…中略…用語の杜撰、修辭の魯莽、文法の破格、徒に巧を弄し奇を衒うて、結屈晦渋、一誦するに足らず、何等の感化を與へられたるやを知らざるなり。…夫の兒童の間に歌誦せらるゝものゝ多くは寧ろ知的方面の用具として格律に諧ふ句調を以て述べられたるに過ぎざれば、兒童が之に依て何等の感化を興へられたるやを知らざるなり。…中略…巴調元とより普紳の堂上に歌ふを恥づるものあると雖も却って趣味の何物たるかすら解せざる僮夫の衷心を動かし…中略…所謂国学者、所謂音楽家なるものゝ僮夫野郎に及ばざること何ぞ甚だしきや。畢竟衷心の情想顧みずして織裁の巧みを弄せるに坐するなり…中略…吾人が校歌の製作を促せしは今日に出でしにあらざるなり。校歌は吾人が形成せる斯の人格的小社会の誣ふべからざる衷心思想の表示たるが故にこれを以て夫の所謂国学者、所謂音楽家の徒輩を煩はして自ら欺くの愚を學ばむとするは宜しく避くべき所にあらずや。…中略…然りと雖も吾人は二三子が素志の孰れにあるかを想うて鑄心鏤腸の勞を多とし進んで提供を敢えてせし勇を賞せざるべからざるなり¹⁹。

ここでは、恐らく兒童が歌っている唱歌を批判し、それを作っている国学者や音楽家に頼らずに自分達で作ろうという意欲を述べている。またいやしい歌を紳士は歌うことを恥じるが、

18 嶽水会雑誌 第21号、p.98 明治36年 第三高等学校嶽水会。『嶽水会雑誌』は明治32年創刊、前身は『壬辰会雑誌』

19 嶽水会雑誌 第27号、p.74-75 明治37年 第三高等学校嶽水会。

趣味を解さない人々は心を動かされ、日々の労働の慰めとしている、と批判している。

校歌批判（第四高等学校）

代表歌となる応援歌「南下軍の歌」の2年前の明治38年に、「校歌の募集を望む」という公示文が四校の『北辰會雑誌』第41号に掲載された。

校歌の価値などは先刻御存じと思へば、…中略…思潮の變動と共に歌の新しくなるべきは明白なり。数にもならぬ二ツ三ツの校歌を以て満足するにも及ばざるべく、其の上今ある歌は想いも譜も實際あまりに讃められた物にあらず。新入生に対し誠に面目を缺く次第なり。中略…一高の盛名と後継者とを得たのも餘程寮歌の御影を受けしなるべし。然し模倣は眞っ平なり。唯新しき理想、國民學生間に流れ初めたる新思潮を歌ひ度く切望するなり。別に野心ある解けにあらず。撰択法や、歌譜のことは当事者に一任せむ²⁰。

四高には教授であり文学者であった藤井乙男作詞、石川県師範学校の音楽教員をしていた新清次郎が曲をつけた校歌「朝に仰ぐ白山の」があったが、これには満足できていなかったことがわかる。

歌謡への批判と寮歌への理想（第六高等学校）

明治41年の六高『校友會雑誌』第20号に「野鄙なる歌謡を撲滅せよ」という文が掲載されている。健全、高尚、勇壮がキーワードであり、軍歌、唱歌、その他の歌謡と寮歌が同列に置かれていることがわかる。

校風の振起を説き 自治を唱ふるもまづかくの如き野鄙なる歌謡を撲滅之に代ふるに健全なる思想を 高尚にして勇壮なる調を持てる歌謡軍歌唱歌寮歌の如きを以て愛吟せしむるに至らずんばあゝ何の效かあらん 野鄙なる歌謡を撲滅すべきは輒斷の急なり²¹。

音楽家作曲への批判（第六高等学校）

明治42年六高『六稜』第22号に「初めて寮歌の成りしを慶賀す」という文章が掲載され、41年に歌詞が当選した「あゝ山陽」の曲を山田源一郎に依頼したことに対する批判が書かれている。音楽家の作曲は「高尚幽遠」で歌いにくく、また寮生には評判が悪かったようである。

作譜は遠く日本有数の音楽家山田源一郎氏に乞ひ、鶴首して其譜のなりて来らん日を待

20 高橋佐門『旧制高等学校全書』第6巻 生活・教養編（1） 旧制高等学校資料保存会 1983 pp.298-299

21 高橋佐門 前掲書 pp.299-300

てり。然るに愈々譜のなりて来るや餘り高尚幽遠にして、惜かな吾人音楽の趣味に淺きものゝ口吟に適せず、中には譜の眞價を解せずして暴論して曰く「譜はあたらよき作歌をだいなしになしたり、落花簾幌を拂つて美人の茵席の上に墜つるは美ならんも、藩離に關りて糞溷の中に落つれば曷ぞ美とはいはん」と²²。

文学的 vs. 朗吟的詩歌（第六高等学校）

明治36年の六高『校友會雜誌』第4号に「吾校の校歌につきて」という論稿が掲載され、文学的詩歌と朗吟的詩歌について論じられている。朗吟的詩歌は快感情を起すにすぎず、美的思想を問題にしていないと批判的である。曲を優先すれば、平凡になり、詩の内容を優先すれば、曲が上手くいかないという矛盾と困難さに苦心していたことが窺える。「されば音符遂に賛美歌的にしても吾人の意に添はざるは、之、當然の數也。」と音楽が賛美歌調になることも、受け入れられなかったようである。

軍歌、祝捷歌、校歌等一般唱歌の如きは、吾人の所謂朗吟的詩歌にして、其目的とする所は、事を寂し、情を述ぶるに、俗的口調を以てして、朗吟の調和をはかり、之によりて一般なる唱者聴者の平凡なる情を感起せしめ、又快ならしむるといふに過ぎざるなる也。されば趣味、美的思想の如きは、以て其問ふ所にあらざるなり²³。

当時の高校生たちは真摯に校歌や寮歌について論じ、必要としていたことがわかる。他校(特に一高)への羨望や対抗意識も、見え隠れする。寮歌と校歌の概念は曖昧であるが、勇壯、健全、元気等が理想の歌に求められたイメージである。また専門家の作を嫌っているのも共通している。おそらく洋楽スタイルの曲は歌い難かったのであろう。しかし、当時流布していた唱歌に対する評価も決して芳しくなく、唱歌や軍歌とは違う歌の創出を目指していたのであろう。

3 スポーツと音楽—社会的地位の表明

前項では、第一、第三、第四、第六高等学校の生徒による批評を抜粋し考察してきた。この時期は、日清戦争の時期とも重なっているため、軍歌や愛国歌が多かったことは先に述べたが、同時に、スポーツと音楽を比べた文章が目立つ。明治26年の校友会音楽部第一回演奏大会の批評に以下のように述べられている。

22 高橋佐門 前掲書 p.302

23 高橋佐門 前掲書 p.305

そは本校生徒は一般に運動などの方には頗る熟達しをれども未だ音楽等をきゝてその美を解するなどのとき高尚なる處には未だ一般に進まざるものと思惟せらしならん即ち折角高尚なる上等の唱歌を歌ひても肝心の聴衆達かオルガンの音は馬の尻の如しとやうの耳を以て聞きたらんには…中略…予は校友一同が音楽の上に於いても一層發達をなしてボートレース、ベースボール等の競争と等しく他校の上に位せんとを切望する。これを成し遂げしむるは又校友諸氏の力與るにあらざれば容易には為しかたければ向後御互に音楽志想の養成に注意あらんとを望む²⁴。

明治27年の第2回演奏会批評の中にも「吾人不敬にして音楽が『ベオスボオル』『ポオト』と同一の品格を有するものなるや否やを知らず。只一中の校風は音楽界裏の勝敗に無頓着なるべきを知れるのみ。」とある²⁵。この演奏会では、聯合唱歌「黒船」を音楽学校校友会諸氏と音楽部部員と競争し、「本校部員の方無難なる歌ひ様なりき」と勝ち負けを意識している。当時の生徒にとって、音楽とスポーツは同じような精神性や目的を持つ活動であったのだろうか。

明治期の学校教育は体育を重視し、欧米から近代的なスポーツを取り入れた。外国語教育による西欧文化受容の突端に立っていた当時の高等学校においては、スポーツの面でも、外国人教師からの刺激や誘導もあり、また全寮制による共同生活が運動競技を育成する好条件となっていた。日本における近代運動競技の發達において旧制高等学校は重要な役割を果たしていたのである。単なる個人的な娯楽や修練の域を出て集団による特殊な精神性育成の場となった。

特に野球は明治20年代に高等学校で最も急速に發達し、最強のチームは一高であった。一高は明治29年に横浜在留の外国人と試合を行う等、独壇場とも言えるほどスポーツ面でも先頭をきっていた。そして対抗試合における応援行為も大きな特色で、地域住民も巻き込む一大イベントであった。一高対三高の野球試合では、一高の応援団が太鼓や罵声、旗やのぼりの竿で地面を叩いて、その騒音で三高が圧倒されてしまったという情景も伝えられている²⁶。当然応援団の合唱や声援も、決して音楽的な行為としては機能していなかった。端艇部の応援歌を「ボートレースの歌」と卑下したのも、このような理由からであろう。しかし、明治36年野球部部歌「天地の正氣向陵に」は、横浜のアメリカ人チームに連勝した時に發表され、その後急速に普及した一高の代表的な寮歌である。作曲者の一人（3人による合作）はあの「嗚呼玉杯」を作曲した楠正一で音楽隊（校友会非公認の音楽部）のメンバー、作詞者山内冬彦は文芸部の委員である。この歌が、相手を圧倒する声援以上の目的で作られたことは明らかであろう。事実、記念祭や茶話会での定番歌となっていく。

このように旧制高等学校においては、スポーツと音楽は密接であった。その目的が単純な勝敗とまで言わなくても、他に対する優位性や社会的ランクの表明の為であったのか、集団によ

24 『校友会雑誌第24号』1893 pp.40-41

25 妙幢子「音楽部演奏会批評」『校友会雑誌』明治27年（1894）第35号 pp.29-34

26 高橋佐門 前掲書 p.353

る精神性の育成だったのかは本論では明らかにはできないが、スポーツの発達が寮歌の発展と普及を牽引したのは確かである。

4 諸外国との関わり

一高の音楽会の演目の中には、ドイツ、アメリカ、イギリス等の外国の愛国歌や民謡が多く見られた。旧制高等学校は履修する第一外国語によって甲（英語）、乙（ドイツ語）、丙（フランス語）というクラス編成がなされており、外国語教育はかなり重視されていた。未だ翻訳本が少なかった当時では、原語で読む力がなければ、学問に必要な基本的な知識さえ得ることは難しかったわけで、旧制高等学校の生徒にとって外国語は必要不可欠な科目であった。政府の欧米化政策の中、その先端を担わされた彼らは、諸外国を意識し、熱意を持って情報を吸収していた。ここでは、この欧米への憧れや興味が寮歌にどのように影響したのかを、検討していきたい。

「嗚呼玉杯」が発表された明治35年第12回記念祭で、国際色豊かな内容の寮歌が東京帝国大へ進学した先輩から寄贈されている。いわゆる寄贈歌である。中西四郎作詞「我が一高は」で、曲は「箱根八里」の譜と記されている。各節の冒頭を抜粋して記す。

- 1 番 我一高は天下の雄 ベルリンエール何かせん
- 2 番 我自治領は天下の魁 イートンエナも何かせん
- 3 番 我寮生は男子の粹 劍橋牛津（ケンブリッジオックスフォード）何かせん

『第一高等学校寄宿寮歌解説』によると、歌詞にでてくるのはドイツのベルリン大学、アメリカのイエール大学、イギリスのパブリック・スクールのイートン・カレッジ、ドイツのイエナ大学、イギリスのケンブリッジとオックスフォード大学である²⁷。いずれも当時、各国を代表する名門校であるが、旧制高等学校は、エリート教育、大学への準備教育、教養教育という点で、イギリスのパブリック・スクールや、アメリカのリベラルアーツ型カレッジ等との共通点もあり、生徒達も意識していたのであろうか。これらの学校の学生歌の影響は何かあったのか、イートン・カレッジとイエール大学を例に考察していく。

イートン・カレッジ（Eton College）

1440年創立で、13-18歳までの男子全寮制のパブリック・スクールである。正式なカレッジソングは“Carmenn Etonense”であるが、良く歌われる愛唱歌はボートソングの“Eton Boating Song”で、年度の終わりや行事で歌われている。もちろんボートを漕ぐ時にも歌われ

27 『第一高等学校寄宿寮歌解説』第一高等学校同窓会 2004 p.78

る。1863年頃、同校の卒業生で詩人、教育家の William Johnson Cory が作詩し、曲はやはり同校の卒業生の Captain Algernon Drummond がインドの連隊にいる時に作曲した。曲はハ長調、3/8 拍子、Allegretto で、比較的ゆったりとしている。詩は、ボートの漕ぎてから見た描写的な内容から始まり、仲間意識や愛校心を詠っている。

一高の端艇部部歌「花は櫻木」とその用途は同じであるが、もちろん曲調は全く異なる。“Eton Boating Song” を歌ったり聞いたりしたという記録は見当たらないが、ボートソングを校歌の代わりとして神聖化したのは、イートン・カレッジの影響であった可能性もある。

イエール大学 (Yale University)

アメリカで3番目に古い歴史を誇る名門大学で、清教徒会衆派によって1701年に創立された。音楽学部も有するリベラルアーツ型の総合大学である。

イエール大学には正式な歌として“Bright College years” があるが、この原曲はドイツの愛国歌 Die Wacht am Rhein である。1881年に在校生により歌詞が改作され、イエールのグリーククラブによって初演された。今でも授業の最終日や卒業式に白いハンカチーフを振りながら歌われる。またフットボールの試合や卒業生の集まりの時にも歌われる。日本では同志社大学のカレッジソングとしてアレンジされて歌われている。

イエールのグリーククラブは1861年の創立で、アメリカで3番目に古い（ハーバード大学グリーククラブは1858、ミシガン大学グリーククラブは1859）。原曲の Die Wacht am Rhein はドイツの愛国歌で、普仏戦争や第一次世界大戦の時に流行した。1840年にドイツの詩人である Max Schneckenburger によって作詩され、1854年にドイツの Chorleiter である Karl Wilhelm が曲をつけた。4声体の重厚で荘重な響きのする曲である。

Die Wacht am Rhein (ラインの守り) は一高の音楽会でも歌われ、「本校教師(外国人)が好んで口笛をふいている」と生徒が語っている歌である。また第10回記念祭の西寮寮歌「ああ大空を眺むれば」のなかに「ラインを守れと歌ひして」という一行が出てくる。一高生にとっては、かなり身近な歌であったと考えられる。

この曲を作曲した Karl Wilhelm はリーダーターフェルのディレクターでもあった。リーダーターフェルは19世紀の初めドイツで結成された男性合唱の為のアマチュアサークルである。音楽的な素養と経済力を入会の条件とした排他的な限られた会員が、仲間と集いの歌を歌う真面目な集団であった。歌うことによって心を高め、連隊意識を持つことが目標とされた。高尚な趣味として、過去の声楽作品を真面目に、厳格に歌うのである。

一方グリーは、3声体以上の無伴奏で歌われる声楽曲であるが、その多くは紳士達のサークルによって歌われることを目的とした。19世紀後半のアメリカでは、グリーやその他の軽い音楽を演奏するカレッジアンサンブルのことを指すようになった。

一高の代表歌に、3声体以上のグリースタイルの歌はないが、男性がサークルに集って皆で歌うという演奏スタイルは模範としたのではないだろうか。そして欧米社会においては、皆で

歌うこと＝合唱は、教養人にとっては単なる娯楽ではなく、そこに集まってくる人達の教養の教化であり、この「集団歌唱による精神性の育成」に影響を受けた可能性はあり得るだろう。

5 明治30年代の旧制高等学校の精神文化

一高の「嗚呼玉杯」(明35)、三高の「紅もゆる」(明37)、二高の「天は東北」(明35)、五高の「武夫原頭に」(明38)等、各校の模範となる寮歌が出揃った明治30年代は、旧制高等学校において精神的な文化が開いた時期と解釈される。D・ローデンは著書“*Schooldays in Imperial Japan*”²⁸の中で、1898年から1905年(明治31～38)に着目して論を展開している。

この時期は、各校に草創期の旧制高等学校出身者である、新しい教師が現れ、生徒達が自分で考えて実践することを促した。新しいタイプの教師には、内村鑑三(一高)、土井晩翠、高山樗牛(二高)、夏目漱石(一高、五高)、西田幾多郎(四高)らがいた。いずれも哲学や外国語に優れた経歴の持ち主で、新しい思想をもたらし、学内は理想主義の雰囲気溢れた。ケーベル博士の大学でのドイツ哲学講義の影響もあり、高等学校にはカントやショーペンハウエルが根付いていった。一高水泳部に端を発し、学生歌として広く歌われたデカンショ節が流行したのも、この頃である。二高では高山樗牛が課外授業で哲学史を講じ、文芸部の活動を保持するために資金援助した。四高では西田が「ダンテ会」「ゲーテ会」等の読書会を組織した。図書館の設備が充実したこと、出版事情の発達等も、高校生の哲学的思考に影響したと考えられる。

20世紀という新時代を迎え、生徒達はドイツロマン主義やキリスト教神学等の「新思潮」の哲学的洞察の影響を受けた。新しく自覚した知識人として、「新時代」を国中に伝令する役目を担ったと感じていた。一高『高友會雑誌』も、明治29年頃からデカルト、ショーペンハウエル、カント、ゲーテについての論考が現れ、東洋中心の思想から、西欧の思想へと内容が広がっていった。「東洋の哲学は溪流、泰西の哲学は洋々なる大海」「漢学は詩文の学」「西欧の学は科学的方法による」等の表現が見られる。

明治20年代のスポーツ至上主義から転じたのもこの頃である。明治31年の一高『高友會雑誌』に掲載された「運動部諸君に訴ふ」は、ボートのテールをペンに、野球のバットを筆に持ち替える生徒が増えているが、これは文芸部が運動部を排除しようとしているのではないと言った内容である。明治32年の同83号掲載の「学生と精神修養」では、武士道において撃剣柔道が、軍人にとって兵式訓練が精神修養であるが高校生にとって主となる精神修養は宗教や哲学を探究することであると述べている。内面的な思考は「もう一つの精神的訓練」と位置づ

28 D.Roden *Schooldays in Imperial Japan-A study in the Culture of a Student Elite* Berkeley and Los Angeles: University of California Press 1980

オリジナルは1975年にウィスコンシン大学に学位論文として提出された研究で、邦訳は『友の憂いに我は泣く』森敦監訳者で、1983年に出版されている。

けられ、弁論のように内面を語ることに関心が向けられ、学内の学生文化の質を向上しようという気運が広がっていった。

また旧制高等学校の生活は、一高の皆全寮制や籠城主義が示すように、日々の煩雑なことから離れ、社会から孤立しており、想像力を刺激するのに格好の場であった。生徒達の理想主義や自然美への豊かな感受性は、美的表現への源となっていた。彼らの優れた文章術や豊富な語彙は、これらの表現を可能とした。どこの高等学校にも才能に恵まれた文学青年がいて、彼らは文芸部に所属し、校内雑誌を発行し、校風を論じて生徒としての責務を果たし、校歌や寮歌の作詩にも熱心であった。当時の日本において、贅沢なほど文化的に高く、哲学的な刺激を受ける希少な環境に恵まれていた高校生達は、20世紀の新思潮を詩にして、音にのせて歌うようになっていった。このような過程を経て、寮歌を単なる声援応援歌や儀式歌から音楽的な歌へと昇華していったと考えられる。

6 寮歌形成期の代表歌

ここでは明治23年から45年までの代表的な寮歌を例に上げ、形成過程における変遷を検討していく。

寮歌第1号「花は櫻木」―第一高等学校（譜例1）

明治23年に「自治寮」が立寮した年、自治寮の初代委員長である赤沼金三郎が、隅田川で行われた東京高等商業学校とのボートレースの為に作詞をし、寮生に歌唱指導を行って誕生した。高等商業を商売と物質の繁栄を熱望するカルタゴ人の象徴とし、一高をローマ人の美徳の象徴とし、このボートレースはポエニ戦争の再演とよばれ、注目の的であったという²⁹。一高生の武士道的精神と、ボートレースの実況が、威勢のよい節回しに載せられ、「デンコデンコ」という合いの手を入れて歌われる。当時流行した兵隊節のような曲調で、詩を吟じるというスタイルの寮歌である。

寮歌のシンボル「嗚呼玉杯」―第一高等学校（譜例2）

「嗚呼玉杯」は明治35年、第12回紀年祭に際して東寮寮歌として選ばれた。矢野勘治（文科）が七五調の歌詞を作り、それに楠正一（理科）が曲をつけている。寮歌の伝統はこの曲から始まったといっても過言ではないほど、旧制高校生から神聖化された「寮歌のシンボル」といえる歌である。矢野勘治は正岡子規の門弟で、一高の短歌会「しのめ会」で活躍していた。寮委員から寮歌の委嘱を受け、まず第11回記念祭西寮寮歌「春爛漫の花の色」を作詞している。

29 D.Roden Ibid. p.123

楠正一は一高の理科の生徒でありながら音楽の勉強に情熱を傾け、東京音楽学校の選科に通い、本格的な西洋音楽の教育を受けていた。同窓の音楽学者田辺尚雄氏は「音楽に於いては天才と云ってよい」³⁰と回想している。楠と田辺は、音楽家島崎赤太郎を顧問に招き一高に音楽部を結成した。この音楽部は後に日本の西洋音楽の受容と普及に重要な役割を担っていく。楠は一高を中退し消息を絶ち、「ソプラノ歌手の三浦環に失恋して故郷に帰った」など、伝説化されている。

西洋音楽の教育を受けた作曲者の曲にしては、詩吟調である。短歌家が詠んだ詩のもつリズムや意味に留意した旋律になっている。例えば「花をうける」で一気にメロディーは上昇、花を浮かせた玉杯を高々と掲げる様子を表現し、反対に「治安の夢に」で一気に最低音まで下がり、この夢が墮落であることを示しているかのようである。「向ヶ岡に」は高音から始まり「そそりたつ」で最高音まで上がる。

「嗚呼玉杯」の現存最古の楽譜はハ長調であるが、昭和になって当時歌われていた通りに五線譜に写したところ、ハ短調に変わっていた。平成16年の最終版でもハ短調となっている。発表後5年間は人気がなかったが、明治40年代頃から歌われるようになり、対抗試合、駒場運動会や帝大運動会、祝賀会で校歌のように歌う等、いつのまにか儀式用の歌となり、現在でも、同窓会、懇親会、寮歌祭等の最後には必ず歌われている。

作曲者不明「紅もゆる」—第三高等学校（譜例3）

校歌待望論の中、生まれた歌であるが、作曲者も含め成立過程は不明である。作詞者は沢村専太郎（明治39年文卒）と判明しているため、作られた年は彼が3年生に在学していた明治38年9月から明治39年7月と推定される。原譜の数字譜の右上には「k.y.」というイニシャルが残されている。

正式名称は「逍遙之歌 壱部三年乙」で、生徒達が過ごした一年間の京都の四季の移り変わりが詠われている。澤村は、中学校時代から少年詩人として知られ、三高時代には河井醉茗が詩欄を担当した文芸雑誌『文庫』派の詩人として活躍した。他にも「覚醒の歌」、「水上部歌」等の三高歌を作詞している。卒業後は京都帝国大学に進学し美学美術史の研究者として活躍した。

作詞作曲者は長らく、澤村胡夷（沢村専太郎のペンネーム）と考えられていたが、昭和38年にある同窓生より原歌譜が披露され、作詩作曲者名が記される箇所にはk.y.のイニシャルのみの記載であったことが判明した。これが契機となり作曲者を特定する調査が卒業生により行われ、三高同窓会『会報』誌上での論争が始まった。最新の研究では、当時京都師範で教鞭をとっていた声明研究家で、水上部歌の作曲者である「吉田恒三」説が有力である³¹。吉田恒三は東京音楽学校を卒業後、京都師範の教諭を務め、また箏曲家鈴木鼓村の作品を五線譜に作譜し直すなどの活動をしていた。原譜の旋律は、4小節×4の16小節で8小節目と16節目で

30 田辺尚雄 「明治音楽物語」青蛙房 1965

31 岸田達也『明治の青春歌 紅もゆる丘の花 何故の作曲者を解く』文藝春秋企画出版部 2013

終止するが、両方の終止音は同型である。また、旋律の運びは4小節毎に起-承-転-結となっており、西洋楽曲の形式感のある曲である。このようなことから、作曲には、吉田恒三のような専門家が関わった可能性が考えられる。

原歌譜から、歌詞、メロディーともに、現行の「紅もゆる」とあまりに違っているのが判明し、歌集の巻頭には原歌譜を別刷りで添付するのが慣例となった。明治44年に初めて歌集を刊行する以前は、歌を作ると歌詞と曲譜を一枚の紙に刷って関係者や希望者に配布したので散逸しやすく、歌集編纂時にはそのほとんどが失われていたと考えられる。例えば1番歌詞の「都の花に嘯けば」は、原歌譜では「都の春に嘯けば」となっている。2～4番の歌詞（夏、秋、冬と詠っていく）を調べれば、原歌譜の「春」が作詞者の本意であったと推測できる。

旋律も例えば原歌譜と明治44年版では既に数カ所の音型が異なり、原歌譜は箏曲調、明治44年版は唱歌調と言える変化がある。原譜の長調が昭和9年版の譜では短調になっている。同27年に五線譜に改訂出版されている。

土井晩翠の作詞「天は東北」—二高等学校

「天は東北」は明治38年発表の第二高等学校の校歌である。英語教授だった土井林吉（後の晩翠）が作詞し、東京音楽学校助教授楠見恩三郎が作曲した。楠見は唱歌、校歌を多く手がけている。明治36年に校歌を募集したが、一等がなかったため、専門家に依頼することとなった。明治38年という時代であるのに、数字譜でなく五線譜で発表されていること、強弱記号や曲想記号も書き込まれていること等は、専門家の作であることの例証でもある。構成も「反復と対比」という西洋音楽の作曲理論に基づいている。代表歌ではあるが、実際にはあまり愛唱されなかったようである。おそらく専門家による洋式スタイルの曲は、当時の生徒の音感覚にはそぐわなかったのであろう。

運動部遠征の歌「南下軍の歌」—第四高等学校

南下軍は明治34年野球・剣道・柔道部による「北の都」金沢から「南の都」第三高等学校への遠征軍が始まりで、後には運動部の対外遠征試合そのものを指すようになった。明治40年に三高、六高、七高が京都に参集して、決戦を交えた時に作られた決起の歌である。この頃西田幾太郎、石倉小三郎（シューマンの流浪の民の名訳）が教授として在職しており、音楽部の創設も教授会で認められるなど、校内に変化があった。作曲者の築瀬成一は音楽部の部員である。

洋楽系の曲調「都ぞ弥生」—北海道帝国大学予科（譜例4）

明治45年、北海道帝国大学³²予科の寮、恵迪寮の寮歌が公募で募集され、寮の記念祭で発

32 明治四五年時点では、東北帝国大学農科大学の予科であった。大正七年、北海道帝国大学創設に際し、北大に移管された。

表された。作詞は横山芳介(農学部)、作曲は赤木顕次(農学部)である。二人が遺した手記から、詳細な成立過程を知ることができる。横山は「人の批評はどうでも自分はかなりの努力を以て此歌を作ったのであることを以て慰みとする」と記している³³。横山は入寮後に、文学愛好仲間とドイツ語の佐久間政一教授を顧問に当時の新進作家の作品を読む評論読書会「凍影社」を発起し、機関誌『辛夷』を発刊した。

曲は3年生の赤木顕次で「作詞の感動が非常によくて、人をチャームする力があつたのと、私と彼とは同室のよしみで、作詞の気に入らぬところがあれば、遠慮なく直す事ができると思うたので、やってみようという気になった」と、作曲の動機を述べている³⁴。幼少の頃から音楽好きでハモニカやヴァイオリンに熱中、尺八も演奏し千鳥会の旗頭でもあった。長男の思い出によると『軍艦マーチ』や『カール王行進曲』が得意で吹いていたという。

横山は「歌のあとから譜をつけたのでなくて、歌に沿うて譜が出来、また譜に沿うて歌が出来、いわば二つのものの中に同じ気持ちがあるということが、この歌がうたいよく、みんなに喜ばれる理由じゃないかと思う」と語っている。同級生から、音楽学校へ送って直してもらった方がよい」と忠告されるが、赤木は「人が直すなら、絶対に発表しない」と応え、当時は「それほど自信満々であった」と回想している³⁵。完成すると、寮の集会室で赤木のオルガンで合唱の練習を行った。

この頃、予科では有島武郎が英語の講師をしていた。有島は札幌農学校出身で、当時は白樺派の中心人物として活躍していた新進の小説家でもあった。有島は教官として恵迪寮に住み、寮生の相談相手をしていたので、寮歌の歌詞は有島が添削をするという習慣があった。しかし横山はほとんど赤を入れてもらえなかったと回想している。「都ぞ弥生」の詩型は八七調で、この八七調は「危険な重苦しい調律」といわれるが、風土的に重々しい北海道の情感を表現するのには成功したとも、評される³⁶。

「都ぞ弥生」はとりわけ洋楽風の楽曲である。発表当時は「歌い難い」とか、「賛美歌風でしめっぽい」と人気がなかった。二長調、2/4拍子のこの曲は、ヨナ抜き長音階で、当時の寮歌一般と音構造は類似している。しかし冒頭の「みやこ」の三つの音で、二長調の主和音である「レ-ファ#-ラ」がファンファーレのように鳴り響き、明確に調性を提示するという特徴が見られる。この「レ-ファ#-ラ」の音型は六回も現れる重要なモチーフと言える。当時としてはかなり洗練された洋楽構造の曲である。現在普及している「都ぞ弥生」の録音には、四部合唱で賛美歌のように歌われる演奏が多くあり、寮歌風ではないと批判されることもある。しかし元来が四声体を想定した楽曲ではないかと思わせるほど自然で、グリーのような曲である。作曲者の赤木顕次が洋楽に親しんでおり、オルガンで作曲ししたということから洋式の楽曲に

33 樋口桜五『『都ぞ弥生』のころ』山口哲夫編『都ぞ弥生』pp.30-42 東京エルム会 寮歌委員会刊 1974

34 赤木顕次「北大寮歌の思い出」山口哲夫編『都ぞ弥生』pp.112-114 東京エルム会 寮歌委員会刊 1974

35 前掲書

36 前掲書

なったのであろう。

また、明治33年頃有島武郎が作詞した校歌「永遠の幸」の影響も考えられる。この曲の原曲はアメリカの南北戦争の北軍の行進曲“Tramp, Tramp, Tramp”で、³⁷前半はアメリカの庶民の歌らしい軽快なメロディーで、後半はプロテスタント教会のコラール風の曲である。この歌に親しんでいたとすれば、予科生の音感覚は内地の高校生よりはるかに洋楽的になっていたと思われる。

「都ぞ弥生」で最も問題となるのはテンポや音符の長さである。10通りほどの歌い方があるとも言われている。赤木顕次が自ら合唱を指揮した際に、譜面に「テンポ90～100、マエストロ」³⁸と自署したので、これが現察歌集にも記されている。しかし、♩=70が適当であろうと、注釈がついている。

戦後の同窓会で一緒に歌ったところ、ある年代以降テンポが遅くなったことが判明した。それは大正末頃と推定され、遅くなった理由としては柔道部寮生が風呂の中で悠々たる調子で歌った、学徒出陣をする友を見送る際、少しでも出発を遅らせようと寮から札幌駅までゆっくりいた等諸説あるようだ。一息二文字、一息四文字といった非常にスローなテンポで歌い五番まで歌って一時間ほどかかる「寮生節」を食事の前に歌った為に、寮食のスープが冷めてしまった等のエピソードもある。作曲した赤木顕次の遺志を「公式の歌い方」とし、正しく伝承する義務と責任があると考える卒業生もいる。

7 形成過程の寮歌一声援から歌曲へ

端艇部の応援歌から始まった寮歌は、実に様々な要素を吸収しながら、今日男声合唱で歌われるような、洋式楽曲を生み出すまでに変遷していった。「花は櫻木」は応援の声援を音にのせた掛け声のようなもので、音楽的には未熟な状態であった。しかし、「生徒が自ら作詞作曲をし、それを定例として継続する」という寮歌の本質の源流となった。

20年代に軍歌や愛国歌を歌ってきたにも拘わらず、生徒達の作る詩は、新思潮の影響を受け、哲学的な思索と自然美への感受性が相まって、文学作品へと昇華されていった。寮歌の作詩を担ったのは、内面性を言葉で表現できる、文章術を練磨した、文学青年達であった。

洋楽黎明期のドイツ至上主義の時代の中にありながら、日本の若者の音感性に響く曲が作られた。それは生徒達が音楽的に未熟だったのではない。ベートーヴェンの月光を、理科実験室のピアノで毎晩弾き、終生クラシック音楽を愛好したという楠正一の「嗚呼玉杯」の曲がそれを例証している。日本語の持つリズムや語調を大切にし、何より当時の仲間の音感性に正直に作られた曲であった。

作曲者不明の「紅もゆる」の変遷は、寮歌は歌い継ぐ者によって永遠に作り続けられるという、伝承の在り方を教えてくれる。譜面に頼らず先輩から後輩へと口伝で教授された寮歌は、その時の気分、声の調子等、おそらく様々な理由で変容されながら歌い継がれた。そこに西洋

の芸術音楽のような「忠実に再現する」という伝統はない。三高では自分の歌う歌詞が歌集に
掲載されると「勝った、勝った」と言って喜んだという³⁸。

四高では、専門家の手に依る校歌「朝に仰ぐ白山の」があったにも拘らず、「南下軍の歌」
が代表的な歌として愛唱された。このことは、生徒達が作った歌が専門家作製の歌より人気が
あったという、寮歌の特質を象徴している。また作曲の契機が運動部の対抗試合であったこと
も、寮歌におけるスポーツと音楽の関係を表している。

「都ぞ弥生」は唯一現役の寮歌である。今日では、グリーのような演奏スタイルの録音がある
一方で、山伏のような装束で、原住民族の儀式歌のようなスタイルでも、歌い継がれている。い
ずれにせよ、この歌の作製過程においては、作曲者と作詩者は同等に存在し、合作という形とな
り、仲間との「同じ気持」が流れていることを大切にしていた。洋楽の影響を強く受けた環境も
あり、その楽曲は様式スタイルではあったが、その真髄は他の詩吟調、声援調、唱歌調、軍歌調
の寮歌と同じであった。その真髄とは「花は櫻木」から流れ続けている「生徒が自ら作詞作曲を
し、それを定例として継続する」ことである。「自分たちで歌を作り歌い継いでいく」ことこそ
が寮歌における音楽的表現であり、音楽文化としての価値もち続けるエネルギーなのである。

(本学准教授＝音楽教育学担当)

参考文献

下道郁子「七大学をめぐる歌一」『U7』vol.37-vol.42 2011-2012 4月-2月号 社団法人学士会刊

下道郁子「七大学をめぐる歌一その魅力と音楽的特徴(第12回学士会関西茶話会)」『U7』vol.51
2013 9月号 社団法人学士会刊

下道郁子「明治20年代～40年代の旧制高等学校の音楽教育―特に第一高等学校の音楽活動を
中心に―」音楽教育史研究第11号 2009 pp.39-51

『青春の北大恵迪寮』恵迪寮同窓会 1991

高橋佐門 旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇 昭和出版 1978

渡辺裕「寮歌の『戦後史』―日本寮歌祭と北大恵迪寮におけるその伝承の文化資源学的考察」
東京大学大学院人文社会系研究科・文化部美学芸術学研究室美学芸術学研究(27)
pp.57-94 2008

第一高等学校寄宿寮寮歌解説 一高同窓会 2004

第一高等学校六十年史 第一高等学校 1939

寮歌集 一高同窓会 2004

『寮歌は生きている』旧制高校寮歌保存会 1966

石川四高記念館 パンフレット 2008

<http://www.etoncollege.com/> 2013年9月アクセス

<http://www.yale.edu/> 2013年9月アクセス

譜例 1 「花は櫻木」

331

端 艇 部 部 歌

赤沼金三郎 作詞

は な は さ く ら き
ひ と は お し づ ら こ ち ら こ

譜例 2 「嗚呼玉杯」

387

第12回記念祭寮歌(明35東)

は調 4/4

1.	1	3	2.	3	5	6.	6	5.	6	i	0
ア	ク	ハ	イ	ニ	ハ	ナ	ウ	ケ	テ		
5.	5	6.	6	5	3.	3	2.	3	1	0	
リ	シ	ツ	キ	ノ	カ	ゲ	ヤ	ド	シ		
3.	3	1	6.	1	2	1.	1	2.	3	5	0
チ	ア	ノ	ユ	メ	ニ	フ	ケ	リ	タ	ル	
6.	6	5	1.	3	2	3.	3	2.	2	1	0
エ	イ	ノ	チ	マ	タ	3.	3	2.	2	1	0
5.	5	1	3.	5	i	2.	2	i.	6	i	0
ム	カ	ガ	ラ	カ	ニ	ソ	ソ	リ	タ	ツ	
6.	i	i	6.	i	5	6.	5	3.	2	1	0
コ	リ	ノ	ケ	ン	シ	イ	キ	タ	カ	シ	

譜例 3 「紅もゆる」(原歌譜)

樂 譜

に調 2/4 k. y.

1. 5 1. 3 | 2. 2 2. 2 | 1. 3 5. 6 | 5-0
紅 も ゆる 丘 の は な

6. 6 6. 5 | i. 6 5. 5 | 3. 2 3. 2 | 1-0
狭 緑 匂 ふ 岸 の ち ろ

i. 2 2. 2 | i. 2 i 6. i | 5. 5 5. 6 | 5-0
都 の 春 に うさぶけ ば

3. 3 3. 3 | 5. 6 5. 3. 1 | 2. 5 3. 2 | 1-0
月 こぞ 懸 れ よしだや ま

明治四十五年寮歌

に 詞 著

森 木 顯 次 君 作 曲

$\frac{1. \ 3}{\underline{\underline{ミ}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{コ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{ヤ}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{1. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{5 \ 5 \ 5. \ 6}{\underline{\underline{ム}}}$	$\frac{5 \ 0}{\underline{\underline{ニ}}}$
$\frac{1. \ 3}{\underline{\underline{ハ}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ノ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{カ}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ヨ}}}$	$\frac{2. \ 1}{\underline{\underline{ウ}}}$	$\frac{4 \ 3 \ 2. \ 1}{\underline{\underline{ゲ}}}$	$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{ロ}}}$
$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{ツ}}}$	$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{キ}}}$	$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{セ}}}$	$\frac{1. \ 1}{\underline{\underline{オ}}}$	$\frac{1. \ 1}{\underline{\underline{ゴ}}}$	$\frac{2. \ 1}{\underline{\underline{コ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{ク}}}$
$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{ソ}}}$	$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{ノ}}}$	$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{ハ}}}$	$\frac{1. \ 1}{\underline{\underline{タ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{レ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{ウ}}}$	$\frac{3. \ 1}{\underline{\underline{ツ}}}$
			$\frac{1. \ 1}{\underline{\underline{テ}}}$	$\frac{6. \ 5}{\underline{\underline{ハ}}}$	$\frac{3. \ 1}{\underline{\underline{ロ}}}$	$\frac{2. \ 3 \ 1. \ 0}{\underline{\underline{フ}}}$
			$\frac{0 \ 1. \ 3}{\underline{\underline{ユ}}}$	$\frac{5 \ 5}{\underline{\underline{コ}}}$	$\frac{6. \ 1}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{ト}}}$
			$\frac{0 \ 2. \ 3}{\underline{\underline{ア}}}$	$\frac{5 \ 6}{\underline{\underline{ソ}}}$	$\frac{3. \ 5 \ 5}{\underline{\underline{ゲ}}}$	$\frac{5 \ 0}{\underline{\underline{ミ}}}$
			$\frac{0 \ 1. \ 3.}{\underline{\underline{モ}}}$	$\frac{5 \ 5}{\underline{\underline{ナ}}}$	$\frac{6 \ 1}{\underline{\underline{ワ}}}$	$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{ガ}}}$
			$\frac{0 \ 6. \ 5}{\underline{\underline{オ}}}$	$\frac{3 \ 1}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{2. \ 3 \ 1}{\underline{\underline{ノ}}}$	$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{セ}}}$
			$\frac{0 \ 1 \ 1}{\underline{\underline{ホ}}}$	$\frac{1 \ 1}{\underline{\underline{カ}}}$	$\frac{2. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{サ}}}$	$\frac{5. \ 6 \ 1}{\underline{\underline{ニ}}}$
			$\frac{1 \ 1}{\underline{\underline{シ}}}$	$\frac{2. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{ヤ}}}$	$\frac{5. \ 6 \ 1}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{1 \ 6}{\underline{\underline{カ}}}$
			$\frac{1 \ 1}{\underline{\underline{カ}}}$	$\frac{2. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{ゲ}}}$	$\frac{5. \ 6 \ 1}{\underline{\underline{ニ}}}$	$\frac{1 \ 6}{\underline{\underline{カ}}}$
			$\frac{2. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{サ}}}$	$\frac{5. \ 6 \ 1}{\underline{\underline{ヤ}}}$	$\frac{1 \ 6}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{5. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{カ}}}$
			$\frac{5. \ 3 \ 5}{\underline{\underline{タ}}}$	$\frac{5. \ 6 \ 1}{\underline{\underline{ワ}}}$	$\frac{1 \ 6}{\underline{\underline{ガ}}}$	$\frac{5 \ 0}{\underline{\underline{ム}}}$
			$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ヒ}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ト}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ノ}}}$	$\frac{5 \ 0}{\underline{\underline{ヨ}}}$
			$\frac{6. \ 6}{\underline{\underline{キ}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ヨ}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{ニ}}}$
			$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{ヨ}}}$	$\frac{5. \ 5}{\underline{\underline{キ}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{ニ}}}$
			$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 5}{\underline{\underline{ゾ}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ア}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{コ}}}$
			$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 5}{\underline{\underline{ト}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ア}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{コ}}}$
			$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 5}{\underline{\underline{ト}}}$	$\frac{3. \ 3}{\underline{\underline{ア}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{コ}}}$
			$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{レ}}}$	$\frac{1 \ 0}{\underline{\underline{ク}}}$	$\frac{2. \ 3}{\underline{\underline{レ}}}$